

**武田正利氏** （株）工房織座代表取締役・織物職人

今治の鈍川温泉に近い場所で、力織機のみを使ってマフラーを織る職人が、今回の「タオルびと」でとり上げる武田正利氏である。工場には9台の力織機が並び、そのうち2台は100年以上前の力織機を武田氏が復元したものだ。昔の力織機を復元し、さらに改良、操作できる技術者は、歴史あるタオル産地の今治でもそういない。武田氏が代表を務める工房織座は、今では全国に名の知れた織物メーカーであるが、その理由が武田氏によって生み出される古い力織機で織るマフラーにある。一度首にまったら、誰もその心地良さに魅了されてしまう。丹念に大切につくられたモノには、作り手の思いと歴史が刻み込まれている。今治でも異彩を放つ武田氏に、現在に至るまでの話をうかがう。



武田正利氏



---

たけだ・まさとし ☆ 1950年12月、今治市玉川町に6人兄弟の4男として生まれる。玉川町立鈍川小学校、玉川町立玉川中学校をへて、1966年4月から1年間、愛媛県立今治職業訓練所（現・愛媛県立産業技術専門学校）の織機調整科で織機の専門知識を修得。1967年4月より宮崎タオル（株）の製織技術者として入社。訓練校入学と並行して愛媛県立今治工業高校定時制課程の電気科に入り、1969年3月に卒業。宮崎タオルでは本社工場の工場長を務めたが、当時の社長であった宮崎弦氏の死をきっかけに独立を決意し、工房織座を設立。


## 1. 幼少期

### 郵便局員の使わなくなった自転車を自分で改造して通学

武田正利氏は、1950年12月14日、父・利三郎氏と母・初子氏との間に4男として今治市玉川町鬼原に生まれた。母親の初子氏は兵庫県神戸市出身で、武田家の親戚筋の関係で縁があって利三郎氏と結婚し、今治にやって来た。




中学卒業の頃の写真

武田家は、代々庄屋  を務めており、玉川町では名の知れた名家であった。裕福な家庭環境で育った利三郎氏はあまり働かず、代わりに初子氏が一家を支えた。初子氏は、近くの <sup>にぶかわ</sup> 鈍川温泉の旅館の厨房で皿洗いの仕事をして家計をやり繰りし、4男の武田氏をはじめ兄3人、姉1人、妹1人の6人の子供を育て上げた。あまりにも辛い現実には、「いつ実家の神戸に帰ろうかと思ひよったんよ」と、初子氏が幼い武田氏に漏らしたことがある。

「貧乏子沢山」の家は当時では珍しくなかったが、母親の苦勞している姿は、武田氏の初期の人間形成において影響を与えている。

武田氏は、1957年4月に玉川町立鈍川小学校に入学した。自宅から小学校まで片道1時間の道のりを毎日徒歩で通学した。そして、同校を卒業後、1963年4月に玉川町立玉川中学校に進学した。中学校までさほど距離はなかったが、ある日、父親が郵便局員の乗っていた中古の赤い自転車を譲り受けて「お前、これで学校に行け」と言って武田氏に差し出した。「これで自転車通学ができる」と喜んだのは束の間で、ひとつ大きな問題があった。身長130センチの武田氏は、自転車のサドルに腰掛けると足が届かない。これでは無

用の長物であり、自転車とにらめっこをしながら「なんとかならないかなあ」と考えた。サドルのスプリングの部分を取り外せば、5センチは短くなる。そう思った武田少年は、さっそく改造にとりかかった。ついでに、郵便局員に間違われぬように、車体の赤い塗装のうえに黒色のペンキを塗り重ねた。ほぼ思いどおりにうまく改造できたが、唯一の心残りは、車体に刻印してあった郵便局のマーク（〒）だけは消せなかったことである。

3年間、改造自転車で通った玉川中学校を1966年3月に卒業した武田氏は、その後も今治に留まることを決めていた。その理由は、兄3人が中学を卒業するとすぐに集団就職で今治を出てしまったので、残された4男の武田氏が家督を継ぐ流れに自然になっていたからである。そして、物心ついた頃から遊び道具を手づくりしたり、モノを改造したりするのが好きだったため、何か専門技術を身に付けようと思い立ち、4月から当時今治市浅川にあった愛媛県立今治職業訓練所 （現在、愛媛県立産業技術専門校）の織機調整科に入学した。



糸の結び方（インタビュー時撮影）

在籍1年間という短い時間だったが、織機のノウハウを叩き込んでくれた新居田<sup>にいだ</sup>末樹<sup>すえき</sup>先生の教えは今も生きており、武田氏が工房織座で織るマフラーのなかに息づいている。新居田先生は、タオル工場で技術者として活躍したのち訓練校の講師になった人であり、技術の伝道者として当時の学生の心のなかに印象強く残っている。というのは、武田氏は、新居田先生から製織のノウハウを教わった同世代のタオル技術者たちと長い間交流があり、仲間と会って話をするたびに「新居田先生の教えのおかげじゃわいね」と口を揃えて言う。

新居田先生から教わった技術のひとつを例に挙げると、製織時に糸が切れたときの糸の結び方である。訓練校に入学して最初に教えてもらった技術で、「他のこと何もせんでええから、一日この練習をせいっ」と新居田先生から言われ、武田氏は無心に練習した。この結び方は、指をいったん持ち替えて結ぶ点に特徴がある。古い織機を使いこなすにはこの作業が不可欠であり、製品の出来を左右する。

訓練校と並行して、愛媛県立今治工業高校の定時制課程電気科にも入学し、4年間、機械や電気などについて専門知識を学び、1969年3月に卒業した。訓練校の推薦により宮崎タオル（株）に入社したのは訓練校を修了した1967年3月だったので、定時制を卒業するまで、昼間は宮崎タオルのタオル工場で働き、夜間は定時制に通った。宮崎タオルではおもに織機調整を担当し、インプット（学び）よりはアウトプット（仕事）中心の生活に変わっていった。

## 2. 宮崎タオルで一人前の技術者として成長

### バイクは青春時代の思い出

1967年4月、武田氏は宮崎タオル（株）に入社し、同社でおおよそ40年におよぶタオル人生を送った。

1967年当時は、高度経済成長期の最中にあり、バスタオルを中心としたタオル製品の売上が好調で、今治全体がタオル景気に沸いていた。宮崎タオルでは、武田氏を含め織機調整を担当する男性の技術者4名、製織を担当する女性の技術者7名ほどが新しく入社した。毎年、おなじようなペースで新しい従業員が加わり、とくに製織工程を担う女性は、中学卒業後に集団就職で宮崎タオルに入社し、その数は増えていった。女性たちは、会社が用意した寮に入り、2交代・3交代制で織機を動かし旺盛なタオル需要に応えた。

宮崎タオルの工場では、自動織機（豊田自動織機製）が主流にな

っていたが力織機も数台置いてあり、武田氏は新旧型双方の織機調整に忙しい毎日を過ごした。織機の技術進歩の歴史は、緯糸をどのように効率よく経糸に入れるかに関する歴史である。手織りの織機は、シャトル（杼）を使って緯糸を経糸に入れるが、シャトルを通す作業も緯糸の補給作業もすべて手でおこなう。力織機と自動織機は、シャトルを使って自動的に緯糸を経糸に入れるが、力織機の場合は補給作業を手でおこない、自動織機の場合は緯糸が無くなる直前で自動的に補給される（これをシャトル・チェンジと言う）。


入社当時、力織機と自動織機のそれぞれの機械の特徴に合わせた技術を身に付ける必要があったが、技術の習得は先輩技術者たちから「盗む」ものであった。誰も手取り足取り教えてはくれない。武田氏は、先輩に混じって一日でも早く技術を覚えるように日々努力した。


社会人になってすぐに嬉しいことがあった。自動二輪車（バイク）の免許を取得し、工場まではバイクで通うようになった。それまでは改造自転車で通勤していたが、自転車より面白いモノを手に入れて<sup>ひとしお</sup>嬉しかった。青春時代の思い出のひとつである。



入社当時、バイクに乗る武田氏

## バブル経済崩壊までブランドタオルを中心に製造

1970年代になると、ブランドタオルのブームが到来した。有名デザイナーによるブランド品として、タオルハンカチからバスマットに至るまでデザイナーの名入りタオルが爆発的にヒットし、世の中は高度成長期から安定成長期へと移行していたが、タオルの売上は好調だった。宮崎タオルは、日織商工（株）を介しておもに

コシノヒロコ  のブランドタオルを生産し、その後もしばらくの間、コシノヒロコ氏とタッグを組んでさまざまなデザインのタオルを製造した。その結果、タオル業界では「宮崎タオルと言えばコシノヒロコ」、「コシノヒロコと言えば宮崎タオル」と言われるほどになっていたが、コシノヒロコのブランド使用権はタオル問屋が持っていたため、問屋の都合でいつ他のタオル会社に乗り換えられるかわからない、という危機感がつねに付いて回った。

プライベートでは、1981年、今治市出身の妙子氏と31歳のと

きに結婚し所帯を持った。



宮崎タオル時代のーコマ

妙子氏は、以前「タオルびと」に登場した谷口史郎氏の妻・照子氏の姉を母親に持つため、武田氏と谷口氏は親戚関係にあたる（谷口史郎氏については「タオルびと」2018年12月号～2019年3月号を参照）。そして、結婚した翌年の1982年に長女の英里子氏、1983

年に次女の佳苗氏、1986年に長男の啓志氏が誕生し、子宝にも恵まれた。

## 試行錯誤のうえ、タオルの「コットンマフラー」が誕生

宮崎タオルが市内の朝倉に第二工場を新設したタイミングで、武田氏は本社工場の工場長に就任した。1993年のことである。工場には自動織機に加え、最新鋭の革新織機も導入された。革新織機の導入は、ボーダー柄のタオル製造がきっかけとなった。シャトル・チャンジによって緯糸が補給される自動織機は、基本的に一色の緯

糸しか使わない。そのため、ボーダー柄のタオルを製造するには、緯糸に多色の糸を使用できる革新織機の方が向いていたというわけだ。

こうして、武田氏は、時代の趨勢とともに変化する機械に対応しながら各作業工程の技術的指導をおこなう傍ら、宮崎氏と自社ブランドの企画・製造にも積極的に携わった。ブランドタオルのブームはバブル経済が崩壊する1990年頃までつづくが、先述のような問屋頼りのモノづくりへの危機感から、宮崎タオルでは1980年代頃より自社ブランドの開発も手掛けるようになっていた。

宮崎氏はアイディアマンであり、そのアイディアをもとに武田氏が形にしていっていった。1995年頃にはタオル生地を使ってバッグやブックカバーなどのファッショングッズや小物にも挑戦した。ある時は「貼る」をテーマに襖に貼るタオルを企画し、奇抜なアイディアで個性豊かなタオルの製造にも挑戦した。しかし、なかなか自社ブランドは売れなかった。

「何やってもなかなかヒット商品が出んのよね。それはなぜかと言うたら、所詮、タオルなんよ。一般的なタオルの形を変えたものだけなんよ」と、武田氏は当時を振り返る。それでもあきらめず何度も繰り返し試行錯誤をつづけた結果、ある商品の開発によって宮崎タオルの自社ブランドが日の目を見るようになった。それがタオルマフラーである。

工場の現場では、「つくっても売れない」を繰り返すなかで、タオルの概念を変える発想で「巻く」をテーマにファッションに着目し、商品化に向けて動き出した。この際だから、タオルの特徴であるパイルも、「拭く」という従来の機能も取っ払って、タオルの固定概念を覆すようなものを作ってみようと挑んだ。そして、試作品が完成したのが1997年。試作品を見せられた宮崎氏は、最初、怪訝そうな顔をしていたが、宮崎タオルの新しい自社ブランド商品として販売を決めた。

商品名は「コットンマフラー」、価格は1枚1,000円。高級な長

繊維綿を原料にして軽量で肌触りの良いマフラーの誕生であった。素材にこだわった商品だったが、1枚1,000円の価格は当時のタオル業界の常識からすると高い価格設定だった。しかし、コットンマフラーはファッション・グッズであり、タオルではない。素材へのこだわり、デザイン性、織りの技術に支えられたコットンマフラーの付加価値は高い。1,000円は妥当な価格設定であると判断され、市場に投入された。

読みは的中した。販売されてすぐさま予想以上の反響があり、瞬く間にヒット商品に成長した。コットンマフラーは、ピーク時で月4～5万枚を売り上げた。コットンマフラーは、宮崎タオルの自社ブランド商品の顔となり、さらにはタオルケットと並んで今治タオルの代名詞にもなっていく（宮崎弦氏やタオルマフラーについては、高橋俊明氏の「タオルびと [2015年1月号、2月号]」でもとり上げたのでこちらも参照）。



宮崎タオルの従業員の皆さん、社長の宮崎弦氏（最後列左）、武田氏（最前列左）

従来は「マフラー」と言えばそのほとんどがウール製のものだった



たが、タオル織機で織られたコットン製のマフラーが新しい市場を開拓するようになると、今治の他のタオルメーカーも製造を開始した。全体的に生産量は増えデザインも多様化し、やがてタオル織機で織られたマフラーは今治タオルを代表するヒット商品となった。タオルケットのときもそうであったが、開発に携わったタオルメーカーは、その技術の特許あるいは実用新案として登録したり、デザインを意匠として登録したりせずに、産地で共有しようとする。コットンマフラーもそうであった。宮崎氏は、「こんな素晴らしいものができたから、一社で独占したらいかんのじゃ。今治の発展のためにならないかんのや」と言ってアイデアを産地に開放した。今治のタオル産地としての伝統は、産地内で競争しながらも共存するところにある。

（次号につづく）

